

新見・国際貢献大学校

人道支援の人材育成などを行っている公設国際貢献大学校（新見市）が、東日本大震災の被災地の福島県南相馬市を多面的に支援している。地震や津波に加え、原発事故に伴う放射能汚染という複合災害の厳しい状況だ。岡山、広島、香川県民らから寄せられた物資を届けるとともに、スタッフを派遣して避難所運営や放射線対策で専門を生かした被災者救済に力を発揮している。

（岡山一郎）



南相馬市民らが放射線を避けて約120人が避難している福島県伊達市の体育館。垂石正仁さん(61)は大震災以来、胸が締め付けられる痛みを感じていた。床に毛布を敷いて寝ているが、朝には

南相馬(福島)を 多面的支援

避難所運営 専門生かす 放射線対策



避難所で被災者らと話す公設国際貢献大学校のスタッフ(右から4人)。共に寝起きして避難生活を支えている＝福島県伊達市

いつも位置がずれ、隣人から苦情が出た。困り果てて大学の医師に相談。震災体験の心理的な負担で睡眠中に体が突っ張るのが原因などと知らされた。「ア

供を契機に南相馬市と縁ができた。避難所には

被災者と寝起き

大学校は、救援物資提供を契機に南相馬市と縁ができた。避難所には

市や県の職員、看護師らも常駐するが、避難所運営の経験はなく、桜井勝延市長から運営支援を要請された。3月末から、大学校で訓練を積んだボランティアの「もたろう国際救援隊」も含め、常時2〜4人を岡山から派遣し、被災者と一緒に寝起きしている。

医療面では、垂石さんのような心的外傷後ストレス障害(PTSD)の予防活動のほか、避難所の湿度が低く感染症の危険が高いことを指摘し、洗濯物を室内で干すようにして改善。避難者には体温計を配って体調を管理する。歩数計配布やラジオ体操導入といった運動不足対策を行い、避難者の健康管理カードも作成した。

子どもをケア

体育館の一室では、避

「長期間支える」

今年2日、大学校は市立原町第一中学校に、雨がばっば約300枚を届け

守るためだ。旧ソ連のチェルノブイリ原発事故被災者支援の経験を生かした。これまでに放射線対策として、雨がばっば計約3600枚、小児用マスク10万枚、消毒液約300本を小中学校に配っている。

放射線を避けて遠隔地の体育館に間借りして授業を始めた学校用に、岡山県に寄贈してもらった移動式黒板30基を届けた。業者が放射線を懸念したため、自分たちで組み立てて授業に間に合わせた。

学用品提供や、市災害対策本部への救援物資輸送も続けている。桜井市長は「心温まる支援をいただき、岡山県のみなさんに感謝します」と語った。

大学校の的野秀利理事長は「原子力の問題で福島への支援が敬遠されている中で、果たす責任は重い。決して一過性にせず、長期に支えていく覚悟だ」と話